

虚実について

福富稔明著, 山方勇次編『漢方 123 処方臨床解説一師・山本巖の訓え』2016 年より抜粋

虚と実についての定義を明確にしておく必要がある。何故なら治療法が異なるからである。

虚と実は、正気にも病邪にもある。しかし治療においては正気の虚が問題であり病邪の実が問題になる。正気の虚は補う、即ち補法を用いる。病邪の実は瀉法を用いる。

正気の虚とは、気虚・陽虚・血虚・陰虚に分かつ。病邪の実とは、細菌・ウイルス・気滞・水滞・瘀血などである。

臨床の実際では、正気の虚と病邪の実とが同時に共存していることが多い。特に慢性疾患では病邪の実と共に正気の虚に対する配慮が必要である。

慢性疾患の気虚に対しては補中益気湯を用いることが多い。病邪に用いる処方に対して補中益気湯を合方あるいは兼用することが多い。

正気にも虚実があり、病邪にも虚実がある
治療では“正気の虚”と“病邪の実”が問題になる

	実	虚	
正気	実	実 細菌・ウイルス 気滞・水滞・瘀血 ↑ 瀉法を用いる	病邪
	虚 気虚・陽虚 血虚・陰虚 ↑ 補法を用いる		

また、放射線療法や抗癌剤療法は正気を傷つけるので、その防止のためにあらかじめ投与しておくこともある。

漢方治療において、慢性炎症に柴胡清肝湯や荊芥連翹湯、竜胆瀉肝湯などを用いる際に補中益気湯を合方するのは、正気に対する配慮である。

本来の「虚実」「陰陽」を考える

鶴田光敏著『山本巖の漢方療法』増補改訂版 2012年より抜粋

鶴田 ここで最も大事な虚実の問題になってくるのですが、これもわかりやすいように私の失敗した経験をお話しますと、私の親友で腎臓ガンになったのがおりまして、同級生ですから、まだ37歳の時に腎臓ガンになって、それで、早期発見で右の腎臓を1個取ったんです。肝臓すれすれのところで危ないところだったんですが、それはうまく取れた。

ところが、その手術をした後に、もう、何しろ立ちくらみしたり、体がだるいとかね、何かどす黒いような変な顔色でね、ちっとも元気が出ないという。そこで私は当然、元気をつけなくてはと思って、補中益気湯ほちゆうえつきとうと十全大補湯じゅうぜんだいほうとうを服せましたが、ちっとも効かないんですよ。

それである時、山本先生に「実は、腎臓ガンの手術の後、ものすごく体が弱っているけど、どうしたらいい

ですか？」って伺いましたら、先生が、「それはね、通導散つうどうさんを服ませなさい」と。通導散つうどうさんに桃仁とうにんと牡丹皮ぼたんぴを入れて、煎じ薬で飲ませる。そして、「芒硝ぼうしやうは体が冷えているから去れ」と。「大黃は、ほんの少しでもいいから入れろ」と言われたんです。

私は、通導散というそれまでの固定観念で、虚実という大きな問題があって、虚というのは体が弱ったような人で、実というのは、もう体力が充実して元気のいいやつだという頭がありますでしょう。まさに、その私たちの友だちというのは、そういう意味から見ると、虚の最たるものですね。

その手術をした後、元気がなくて、気力がないというのは、もう、虚の最たるもので、顔色も真っ青で、下痢をしちゃって、ちょっと歩いただけでフーフー言うわけです。それで、

通導散というのは実を瀉す薬の最たるものだと思っていましたから、これで本当に良くなるのかなと思ったけれど、私はそれまで先生の言われた通りにやって全部成功してきましたから、その時も通導散を煎じ薬で、桃仁、牡丹皮を加えて、下痢しているけど大黄を1gだけ入れて、それで、芒硝を抜いて服ませました。そうしたら、2週間ぐらいで元気になった。顔色が良くなって、よく効いた。よっぽどあれは元気が出る薬だなと思ったんです。

そして、先生にそのことをご報告申し上げて、「先生、あれ、どういうことですか？」って伺ったら、「そりゃあ、ガンというものは、^{おけつ}瘀血の病邪の実した最たるもんだから、それを瀉するには通導散がいい」と。まだ30代で若いですから、まず、その瘀血の病邪を瀉しておいて、その後、補益するというふうでないといかんということを言われたんです。その通りやって、いま彼は元気にしております。

だから、そうなりますと先生、どうしてもやはり、今の漢方家の多くは、正気の虚実しか言わないという問題がありますね。いわゆる正気と

いうのは、気と体力だとか、抵抗力だとか免疫力だとか、そういうものの虚実しか言わずに、それに対する方劑しか言わないということ。これでは全然、効果がないと思います。正気にも虚実があるし、それから病邪にも虚実があると。

特にガンなんかの場合は、やっぱり邪の実した瘀血というものがあれば、その最たるものだから、それを瀉さなければ良くならないということ。これは全く大きな、そして今までの漢方で先生以外の方は言われていないことじゃないかと思うんですが、それはどうでしょう？

山本 そうですね。だけど、そんなことを言い出したのは、それは昭和あたりの漢方家だけですよ。

鶴田 あの正気の虚実だけ言い出したということですか？

山本 昔はそんなこと言ってなかった。それを昭和の漢方家が、ああいう「簡便漢方医学」をつくった。その大綱に陰陽、虚実を取り上げた。昔はそうでもなかった。

鶴田 そうですか。今の虚実の考え方は、まだそんなに新しいのですね。

山本 ええ。^{だいさい ことう}大柴胡湯でも「顔色

は菜っ葉の如く……*」と書いてあるでしょう。正気は虚しているが、それでも、腹の中に瀉さなきゃならない毒（病邪）があるから瀉しているんです。違いますか？

鶴田 そうですね。

山本 だから、それは昔の人は皆そう、それが普通だったんです。それがいつの間にか正気の虚実で虚証とか実証などと病人を分類して、わけのわからない方剤を与えるのです。方剤の中味もわからずに。

それで、顔色は菜っ葉の如き、元気のない人を大柴胡湯で治したのは、吉益南涯だと思います。

鶴田 そうですか。それも読んでなかったな。

山本 良山のことは『師説筆記』^{しせつひっき}というのを読んでも、よくわかるけどね。もう、文献も見ず、彼の診療も知らず、『傷寒論』や古方の先駆者だって、誰か1人言ったら、皆、真似してついて行くけども、おかしいですね。

顔色は……〔症例〕『続建珠録』の大柴胡湯治験／吉益南涯（島之内の人（周蔵）の治験） 腹痛を患っていたが、ときどき憂うつになったり、怒ったり感情の起伏が著しい。この状態が数年続いたところで診療した。疾は胸脇に在り、心下に抵抗があつて腫瘍状であり、圧痛がある。身体は痩せて顔色は菜っ葉のようで便秘し、食欲が半減したとのことで、大柴胡湯を与えたら1年余りでやや軽快した。そこで休薬していたら半年ほどで再発し、心下の塊は大きくなり、瓜状で硬く充実してある。患者は苦悶状で感情の起伏が激しく、狂状を呈した。そこで前方に芍薬散を兼用したところ、3ヵ月ほどで悪臭のものを大量に下して快癒した。（『日本医師会雑誌』より）